

経正都落

修理大夫経盛の子息、皇后宮亮経正、幼少にては
 仁和寺の御室の御所に、童形にて候はれしかば、
 かかる忽劇の中にもその御名残きと思ひ出でて、侍五
 六騎召し具して、仁和寺殿へ馳せ参り、門前にて馬より
 下り、申し入れられけるは、「一門運尽きて、今日既に
 帝都をまかり出で候ふ。うき世に思ひのこす事とては、
 ただ君の御名残ばかりなり。八歳の時参りはじめ候ひて、
 十三で元服仕りしまでは、あひいたはる事の候はぬ外は、
 あからさまにも御前を立ち去る事も候はざりしに、今日
 より後、西海千里の浪におもひて、またいづれの日
 いづれの時、帰り参るべしともおぼえぬこそ口惜しく候へ。
 今一度御前へ参って君をも見参らせたう候へども、既に
 甲冑をよろひ弓箭を帯し、あらぬ様なるよそほひに
 まかりなつて候へば憚り存じ候ふ」とぞ申されける。御室
 哀れにおぼしめし、「ただそのすがたを改めずして参れ」
 とこそ仰せけれ。

経正その日は紫地の錦の直垂に、萌黄色の匂の鎧
 着て、長覆輪の太刀をはき、切斑の矢を負ひ、滋藤の弓
 わきにはさみ、甲をばぬぎ高紐にかけ、御前の御坪に
 かしこまる。御室やがて御出あつて、御簾たかくあげさせ、
 「これへこれへ」と召されければ、大床へこそ参られけれ。
 供に具せられたる藤兵衛有教を召す。赤地の錦の袋に
 入れたる御琵琶もって参りたり。経正これをとりついで、
 御前にさしおき、申されけるは、「先年下しあづかつて
 候ひし青山もたせ参つて候ふ。あまりに名残は惜しう
 候へども、さしもの名物を田舎の塵になさん事、口惜し
 う候ふ。もし不思議に運命ひらけて、また都へ立ち帰る
 事候はば、その時こそ猶下しあづかり候はめ」と泣く泣く
 申されければ、御室哀れにおぼしめし、一首の御詠を
 あそばいてくだされけり。

あかずしてわかるる君が名残をば

のちのかたみにつつまてぞおく

経正御硯くだされて、

くれ竹のかけひの水はかはれども

なほすみあかぬみやの中かな

修理大夫経盛の子息、皇后宮亮経正は、幼少のころ
 仁和寺の御室（法親王）の御所に、元服前の稚児姿で
 お仕えていたので、このように慌たしい中でも、君の面影
 をさと思い出して、侍五、六騎をひき連れて、仁和寺殿に
 駆けつけて、門前で馬から下りて、申し入れることには、「わ
 が一門は運尽きて、今日はもう都から出て行きます。つらい
 この世で思い残すのは、ただ君の面影ばかりです。八歳の
 時にはじめてお仕えて、十三歳で元服するまで、病気で
 伏せていたとき以外は、わずかな時間も御前を離れること
 はございませんでしたのに、今日から先は、西海千里の波に
 赴いて、ふたたび、いつの日、いつの時に帰参できるかもわ
 からないことが残念でございます。もう一度君の御前に参上
 して、お目にかかりたいと思いますが、すでに甲冑を身に着
 け弓矢を帯びて、平時とは異なる姿になっておりますので、
 はばかられます」と申し上げた。御室は哀れに思い、「そのま
 まの姿で参るがよい」と言ってくださった。

経正は、その日は紫地の錦の直垂に、萌黄色を濃淡に
 染めた鎧を着て、長覆輪の太刀をはき、切斑の矢を負ひ、
 滋藤の弓を脇にはさみ、甲を脱いで高紐にかけ、御前の坪
 庭にかしこまって座る。御室はすぐにお出ましになって、御簾
 を高くあげさせ、「ここに、ここに」とお呼びになるので、経正は
 大床に上がった。供として連れてきた藤兵衛有教を呼ぶ。
 赤地の錦の袋に入れた琵琶を持って来た。経正はこれを受
 け取って、御前に置いて申し上げるには、「先年、授けられ
 てお預かりしておりました、青山を持ってまいりました。あま
 りに名残り惜しゅうございますが、これほどの名器を田舎の塵
 にするのは残念でございます。もしも、不思議なことに運が
 開けて、ふたたび都に立ち帰ることがかないましたら、そのと
 きにまたお預けください」と泣く泣く言ったので、御室は哀れ
 とお思いになり、一首の御歌を詠んでお与えになった。

心を残したまま別れるあなたの形見のこの琵琶を、

あなたを思い出すよすがとして包んでおきます

経正は硯を与えられて、

呉竹の懸樋を流れる水のようにこの世は変わっても、

それでも飽きることなく住んでいたい御所の中だなあ

さて暇^{いとま}申して出でられけるに、数輩^{すはい}の童形^{どうぎょう}、出世者^{しゅっせしや}、坊官^{ぼうかん}、侍僧^{さぶらいぞう}に至るまで、経正の袂^{たもと}にすがり、袖^{そで}をひかへて、名残を惜しみ、涙をながさぬはなかりけり。その中にも、経正の幼少^{こじ}の時、小師^{こし}でおはせし大納言法印行慶^{だいなごんのほういんぎょうけい}と申ししは、葉室^{はむろの}大納言光頼卿^{こうらいのきょう}の御子^{おんこ}なり。あまりに名残を惜しみて、桂川^{かつらがわ}のはたまでうちおくり、さてもあるべきならねば、それより暇^{いとま}こうて泣く泣くわかれ給ふに、法印かうぞ思ひつづけ給ふ。

あはれなり老木若木も山ざくら

おくれさきだち花はのこらじ

経正の返事には、

旅ごろも夜な夜な、袖をかたしきて

思へばわれはとほくゆきなん

さてまいてもたせられたる赤旗、ざっとさしあげたり。あそこここにひかへて待ち奉る侍ども、「あはや」とて馳^はせあつまり、その勢^{せい}百騎ばかり、鞭^{むち}をあげ駒^{こま}をはやめて、程なく行幸におつつき奉る。

青山之沙汰

この経正^{つねまさ}十七^{うさ}の年、宇佐の勅使を承てくだられけるに、其時^{そのとき}青山を給はって、宇佐へ参り、御殿^{ごてん}におかひ奉り、秘曲^{ひきく}をひき給ひしかば、いつ聞きなれたる事はなけれども、ともの宮人^{みやうど}おしなべて、緑衣^{りよくい}の袖をぞしぼりける。聞き知らぬ奴までも村雨^{むらさめ}とはまがはじな。目出たかりし事どもなり。

かの^{かの}彼青山と申す御琵琶^{おんびわ}は、昔仁明天皇^{にんみょう}の御宇^{ぎょう}、嘉祥三年^{かしやう}の春、掃部頭貞敏^{かもんのかみていびん}渡唐^{たいとう}の時、大唐の琵琶^{たいとう}の博士廉承武^{はかせれんしやうぶ}にあひ、三曲を伝へて帰朝^{けんじやう}せしに、玄象^{ししまる}、師子丸^{ししまる}、青山、三面の琵琶^{そうでん}を相伝してわたりけるが、竜神^{りゅうじん}や惜しみ給ひけむ、浪風^{なみかぜ}あらく立ちければ、師子丸^{ししまる}をば海底に沈め、いま二面の琵琶^{わがちやう}をわたして、吾朝^{わがちやう}の御門^{みかど}の御宝^{おんたから}とす。村上^{せいたい}の聖代^{おうわ}応和のころほひさんごやちゅうのしんげつ^{りやうふうさつ}、涼風^{りやうふう}颯々たりし夜^よなか半^{はん}に、御門^{みかど}清涼殿^{せいりやうでん}にして玄象^{けんじやう}をぞあそばされける。

そうしてお別れを申し上げて退出したところ、たくさんの稚児、役僧、坊官、侍僧にいたるまで、経正の袂にすがり、袖を引いて、名残を惜しみ、涙を流さないものはいなかった。その中でも、経正が幼少の時、僧になったばかりだった、大納言法印行慶という人は、葉室大納言光頼卿の御子だが、あまりに名残惜しくて、桂川のそばまで送り、いつまでもついて行くわけにもいかないので、そこでお別れを言って、泣く泣くお別れするときに、法印はこのように詠んだ。

悲しいことだなあ。老いも若きも、山桜が残りなく

散るように、早い遅いの違いはあっても残らず

いなくなってしまうのだ。

経正の返事には、

旅をすれば毎夜毎夜ひとり寝をして、思えば私は

遠くに行ってしまうのだ

そして、巻いて持たせていた平家の赤旗を、ざっとさし上げた。あちらこちらに控えて待っていた侍たちは、「おお」といって駆け寄ってきて、その軍勢は百騎ぐらい、鞭をあげて馬を急がせて、程なく行幸に追いついた。

この経正が十七歳の年、宇佐の勅使に任じられて下ったが、その時、青山を賜って、宇佐に参り、八幡宮の御殿にむかって、秘曲を奏でたところ、いつも聞いて耳に慣れているということはないが、供の宮人はみんな涙を流して、緑衣の袖をしぼった。聞いても分からないような奴までも、雨の音とは間違えないだろうよ。すばらしいことだった。

あの青山という琵琶は、昔、仁明天皇の御時、嘉祥三年の春、掃部頭貞敏が唐に渡った時、大唐の琵琶の博士廉承武に会い、三曲を伝授されて帰国した時に、玄象、師子丸、青山という三面の琵琶を相伝して海を渡ったが、竜神が惜しんだのだろうか、浪風が荒く立ったので、師子丸を海底に沈め、残りの二面の琵琶を持ち帰って、わが国の帝の御宝とする。

村上天皇の尊い御代、応和のころ、十五夜の月が白光り、涼風がさわやかに吹いた夜中に、帝が清涼殿で玄象を奏でおられた。

時に影のごとくなるもの御前に参じて、優にけだかき声
 にて唱歌をめでたう仕る。御門御琵琶をさしおかせ
 給ひて、「そもそも汝はいかなるものぞ。いつくより来れ
 るぞ」と御尋ねあれば、「是は昔貞敏に三曲をつたへ
 候ひし大唐の琵琶の博士廉承武と申す者で候ふが、
 三曲のうち秘曲を一曲のこせるによって魔道へ沈淪仕
 りて候ふ。今御琵琶の御撥音妙にきこえ待る間、参入
 仕るところなり。ねがはくはこの曲を君にさづけ奉り、
 仏果菩提を証すべき」由申して、御前に立てられたる
 青山をとり、転手をねぢて秘曲を君にさづけ奉る。三曲
 のうちに上玄石上是なり。その後は君も臣もおそれさ
 せ給ひて、この御琵琶をあそばしひく事もせさせ給はず。
 御室へ参らせられたりけるを、経正の幼少の時、御最愛
 の童形たるによって、下しあづかりたりけるとかや。

甲は紫藤の甲、夏山の峰のみどりの木の間より、有明
 の月のいづるを、撥面に書かれたりけるゆゑにこそ、
 青山とは付けられたれ。玄象にもあひおとらぬ希代の
 名物なりけり。

その時、影のようなものが御前に参って、美しく気高い声で
 すばらしい歌を唄った。帝は琵琶をお置きになって、「そもそも
 おまえはどういったものか。どこから来たのだ」とお尋ねになっ
 たので、「私は昔、貞敏に三曲を伝授しました、大唐の琵
 琶博士の廉承武と申す者でございますが、三曲のうち秘曲
 を一曲伝え残したことによって、魔道に沈んでおります。今、
 琵琶の撥音がすばらしく聞こえましたので、参上いたしました
 ところです。ねがはくはこの曲を君にご伝授して、成仏の願
 いを果たしたいと思います」というようなことを申しあげて、御
 前に立てている青山を手に取り、転手をねぢて秘曲を君
 にご伝授した。三曲のうちの上玄石上が、これである。その
 後は君も臣もおそれて、この琵琶を奏でることもなかった。
 御室に差し上げたものを、経正が幼少の時、最もご寵愛に
 なった稚児だったので、授けられてお預かりしたということだ。

甲は紫藤の甲で、夏山の峰のみどりの木の間から、有明
 の月が出る様子が、撥面に描かれているので、青山と名付
 けられた。玄象にも劣らない、希代の名器であった。